

グループ展「花と鳥」

安藤正子、井上有一、榎本耕一、大竹利絵子、大宮エリー、川島秀明、工藤麻紀子、桑原正彦、染谷悠子、
榎石憲蔵、西村有、福田平八郎、スナ・フジタ、三宅信太郎、ムラタ有子

2021年7月16日[金] - 8月21日[土] 11:00-19:00 日月祝 休

今回の展覧会は「花と鳥」。

花鳥画というジャンルがあるように、この題材は昔から描き続けられています。いま、私たちのギャラリーでも、何人かのアーティストはモチーフに花とか鳥を選んでいきます。

なぜ、今も、この題材が有効なのか?そんなことを考えていたからか、最近、アーティストやギャラリーの人たちで、鳥を飼っている人たちがいることが見え始め、Facebook でも花の写真に目が行き、犬の散歩の途中でも花や鳥を気にし始めました。なら、いま、この花と鳥を絵にしている人たちの作品を集めてみよう、あと、花と鳥のモチーフでアーティストに新作を依頼してみようと思い、この展覧会ができました。

アーティストから、コメントももらいました。ぜひ、展覧会を楽しんでください。

小山登美夫



安藤正子

いちにち、ふつか、留守をする。

すると、帰ってくる私を一番に待ち受けているのは、モコモコと体積を増した庭だ。

子どももそうだ。

ふつかも見ないと、アレ、随分大きくなったネー。

いつだって違う。

昨日、ぐらぐらになってた子どもの前歯が抜けて、穴ぼこ歯茎にギザギザした永久歯がのぞいてた。

絵描きはいつまでも追いつけない。



榎本耕一

チュン太（セキセイインコ）との暮らしを通して、鳥全般に魅了され深く興味を持つようになりました。

鳥の性質の一つに、「その身体に受けた問題を受け入れて生きていく」という記述を見つけたことがあります。鳥は小さな体に起きた問題を問題のまま受け入れつつ生きていく。どんな状況にあっても生きる方向に体勢をとる。可愛らしい姿の中には、きちんと厳しさがあるのです。しなやかな鳥の生はそのまま、絵画の中に取り入れるべき何かを備えてあるように感じるので



大竹利絵子

ある日、ふっと鳥をつくりたくなりました。消えたり、現れたりするそんな鳥を。その日以来、鳥はたびたび私のもとにやってくるのです。



大宮エリー

花はエネルギー、花は波動、花は癒し。

花は語りかけてくれたり、寄り添ってくれたり微笑んでくれたり
お話してくれたりします。

花とお話してから、花の気持ちになって筆を動かします。

わたしをこう描いてね!というメッセージが聞こえてきて

その通り描きます。

花を見るたび、神様は偉大なアーティストだなと思うんです。

チューリップにしてもハイビスカスにしても、これ考えたなんて、天才!

なので、すごいなあ、すごいなあという神へのリスペクトを抱きながら

その感動で描いています。



川島秀明

普段は人物ばかりを描いているのですが、感情というものから離れたくて、試みに花を描いてみました。

しかし花と言っても、それは観賞用に生けられた花。

無意識に、花そのものよりも、それによって慰められる人物をイメージして描いていたのかもしれない。

後から思い出したのですが、かつて山の中で暮らしていた時も、僕は木や花の名前を全く憶えず、呆れられていました。

自分にしか興味が無かったのでしょう。

それが絵を描く動機にもなってきたと思うのですが、最近は加齢の所為か、緑を眺める事に慰めを覚えるようになり、逆に今までのような絵が描き辛くなっています。

今回出す作品は数年前の試みですが、花というモチーフは、むしろ今後のヒントになるかもしれません。



工藤麻紀子

鳥も花もどんなところにも常に見かけて当たり前みたいだけど、季節の変化や場所の違いで、聞いたことない声聞こえたり、見たことないのあったり、そういう変化が気になります。

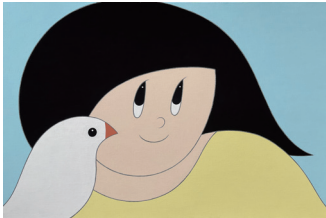
今回、描いた鳥は前に住んでいた所にはいなかった鳥で調べたらガビチョウとハッカチョウという鳥で

外来種らしいけど彼らにはそんなこと関係なく、頑張ってる。



染谷悠子

花の終わりには「死ぬ」ではなく
「枯れる」と表現することを美しく感じている。
鳥はその花を纏う生き物。



極石憲蔵

私は花を描くときに、クリスチャン・ディオールの言った言葉を思い出します。「花は神が世界に与えたものの中で、女性の次に最も愛らしいものである。」



西村有

花について

まず自然のものであれだけ鮮やかなものがあることに素朴な驚きがあります、花がどういう構造であんな風に発色できるのかとても不思議です。

時間の経過と共に変化していく姿もいいです。大抵、元気がなくなってきたくらいのところで絵が完成します。

いつの時代、どここの国でもずっと描かれてきたように、花は絵描きにとって永遠のモチーフだと思えます。

鳥について

アトリエの周りにはいろんな鳥がいます。

この絵を制作していた4月、5月も数種類の鳥の声があたりに響き渡っていました。

そんな天然のBGMを聴きながら、鳴いている鳥の姿を想像していました。

鳩は家の庭によくやってきます。駅とか公園にいるようなのではなくて、ヤマバトとかキジバトとか言われているやつです。本当はグレーの中に微かな色彩がたくさんあって非常に美しい鳥です。

朝によくとまっている木があって、その姿がとても印象的でした。



スナ・フジタ

私達がうつわを作る時は必ず動物や植物を絵付けするのですが、その器の表面の空間をわりと隙間なく埋めてしまう癖の様なものがあり、何も描いていないちょっと大きめの空間があるとなんだか落ち着かなくなり、「ちょっと寂しいな」と思った時に、言い方は悪いのですが、鳥はとても便利なモチーフなのです。

彼らはその多くが飛びますから、地面や木などがいないところにもポツンと描けますし、大きさもいろいろ色もいろいろ、なるべくカラフルなものを作りたい私達にとっては差し色の様にうつわ空間を彩れるのです、本当に助かります。

もちろん便利に使うだけではなく、田舎に住んでいる私達にとって鳥達はとても身近で描き甲斐のある対象でもあります。ちょうど今は家の玄関にツバメが巣を作っていて、その子育ての様子を眺めたり、隣町では結構繁殖しているコウノトリがその大きなくちばしを持つ巨体でハイウェーを走っている私達の目の前を飛んで行ったり、カラスが食べ終わった蛇の骨を目の前に落としてきたり、ブルーベリーやグミやイチジクは小鳥達と競いながら収穫したり、そういったことを昔は素直にただ楽しんで見ていたのですが、今はネタのひとつとして心にメモしているのは、「打算的だな。」と思わないでもありません。



三宅信太郎

今まで花を描くことはほとんどなかったです。

花は造形として完成され過ぎていて、自分がそれを描く理由が見つからなかったからかもしれません。

鳥はたまに描いていましたが、植物とともに描くことは少なかったかもしれません。

花鳥画のようなものも同じ理由で自分の入り込む隙が見当たらなかったのだと思います。

今回の花と鳥のシリーズを描き始める前は遊園地を描いていました。カラフルでごちゃごちゃして細部まで描いて。その反動かもしれませんが遊園地のあとは動物を描き始めました。色も形も極力抑えて、シンプルに。

その延長で今回の花と鳥を描き始めました。

これまでの自分では、花の、葉の細部に眼がいていたでしょうか。

鳥の造形にオリジナリティを求めていたでしょうか。

今はそういう感覚ではなく自分がある空間、時間を共有している存在として漠然とした気配を感じて感じて花や鳥が描けるようになったという気がしています。

視覚的な細部に囚われることなく余計なものを省き落としてシンプルにシンプルに。

花を、植物を積極的に描くようになって、ひとつまた自分を縛っていた固定観念が柔らかく解れ始めたのではないのでしょうか。



ムラタ有子

色とりどりの鳥たちは、動物園や本の中でしか会えないけれど、

遠いどこかで生きていてる。

強くたくましく、本能にしたがって。